嗚呼ルソン島「草むす屍」

吉田　正人　陸士60

はじめに

昭和49年夏、私はフィリピン戦跡訪問団（ＰＩＣ）に初参加した。亡父の埋葬地域の慰霊巡拝と、亡父の遺骨収集の可能性についての現地調査を兼ねて、羽田発のフィリピン航空機でマニラに向かった。

さて、亡父（享年48）はマニラ在留邦人（台湾拓殖会社勤務）だったが、昭和19年マッカーサーのフィリピンへの逆上陸により、マニラからルソン島北部のソラノ市郊外へ移動して、軍の野戦補給開拓団で、軍属として活動中、マラリアや赤痢に罹患、翌20年2月に戦病死した。

昭和40年代の終わり頃、私は戦時下、父を埋葬してくれた当時の元台湾拓殖の復員した社員らを探し、埋葬地点の聞き取り調査をした。すでに戦後30年近くの時が経過しており、諸氏の記憶も曖昧ながら、できあがった一応の略図を頼りに亡父の遺骨収集を思い立ち、その後、年1度で5度にわたり渡比した。

昭和20年の終戦時には、山下将軍の比島方面軍は、日本本土防衛決戦の準備のため持久戦の命令が下されていた。しかし、当時の比島方面軍は、圧倒的な米軍の前にどうにもならない不利な戦いを強いられた。ルソン島では、北部の山岳地帯へ後退をしながら8月の終戦日まで、残存兵力を糾合編成して死闘を続けていたのだ。

そのために、終戦までの僅か6カ月程の期間に、ルソン島地域だけでも、在留邦人を含めて、30万人を超す尊い命が喪われた。また、この6カ月間は、泥水をすすり、草を嚙んでの徹底抗戦が続いたために、病餓死による犠牲者が、戦死・戦傷死よりも上回ったと言われている。

フィリピン戦跡訪問団の巡拝は、昭和40年を過ぎた頃から始まり、私

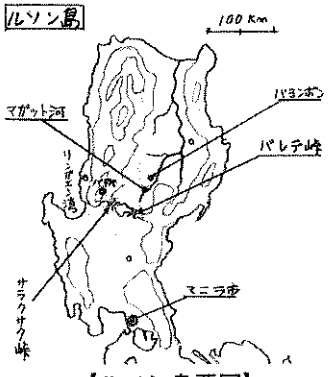
が初参加した時には、すでに50回目を超えていた。フィリピンは、日本に近い国、そして最多数の同胞が散華し、未だ山野に眠っている国なので、在留邦人の犠牲者の遺族の妻子の巡拝参加も多く、肉親の眠るジャングルにできるだけ近づいて、亡き父や夫に呼びかけるその姿は、胸に迫るものがあった。

戦車第2師団の元参謀との出会い

2度目のマニラ行の羽田からの機中で、隣り合わせたのが元参謀（陸士の先輩）で、戦車第2師団の英霊への弔問行を続けられていた人だった。機中の3時間半、時折声を詰まらせながら述懐されたのは、大東亜戦争の戦車第2師団のルソン島北部の激戦での、先輩の体験談だった。私にとって今も忘れがたく、記憶をたどりながら記述したい。

昭和20年の正月早々、その先輩参謀はクラーク基地から新司令部偵察機で飛び上がり、マニラの西南方のスール海上へ、空中偵察に向かった。そこには、南支那海へ北上する米軍の大輸送船団が航行していた。その船団の数を確かめるべく更に南へ飛んだが、それは果てしなく輸送船が続き、遠方には護衛空母も望見されるという自分の目を疑うばかりの光景だった。その後、この大船団は1月17日頃には、北方のリンガエン湾一帯へ幅広く突入してきた。

戦車第2師団は昭和17年満洲で編成され、支那事変から終戦直前まで戦い続けた。ルソン島に移駐したのち、第2師団は山下方面軍隷下で、その正面の主力陣地で日米両軍にとって初めての戦車部隊相互の戦いとなった。また、ルソン島は、アメリカが統治していた島であり、また特に〝I shall return〟と、マッカーサーが大見得を切って脱出した島であるがゆえかマッカーサー逆上陸時の砲爆撃は、特に猛烈を極めていた。これが物量の差なのか、と思い知らされたと述懐していた。



【ルソン島要図】

1月9日、リンガエン湾へ逆上陸してきた米軍は、開戦時とは全く様変わりで、沖の大型艦からの圧倒的な艦砲射撃と、爆撃が続いて、上陸してくる米軍部隊を、リンガエン湾の水際で阻止することなどとてもできることではなかった。日本軍はじりじりと後方の稜線へ退くばかりだった。翌日から、内陸地点での数日間にわたる戦車戦では、激しい砲の撃ち合い。あたり一面は、白と黒の硝煙や煙が舞い上がり、やがてその煙が薄れるとあたりが戦闘前と全く様変わりして現れてくる。そして、昧方の戦車隊は、逐次擱座して動かなくなり、彼方の米軍戦車隊は、最後の近接戦闘を避けて、マニラ街道へと突進していった。

昭和20年1月下旬には、残存戦車は北方の山岳地帝へ、バレテ峠からサラクサク峠の山腹陣地での肉弾戦を繰り返して、歩兵との共闘を続けた。各所で戦車砲塔だけを地上に出して、トーチカ方式の戦いを継続したが次々破壊され、玉砕する戦線が続いた。生き残った戦車兵は歩兵となって戦いを続けた。山岳路を北へ移動疎開中の一般邦人も誘導保護しながら、北へ北へと険しい悪路をひたすら歩いた。

北部ルソン島（山岳地帯）に移動集積した日本軍の軍需品・食糧倉庫は、それなりに隠されていたのだが、何故かこれらの地点が、反復爆撃を受け、またその周辺地区に疎開中の在留邦人にも、激しい爆撃で犠牲者が出た。戦後になって分かったことだが、これらはすべてルソン島内での住民のスパイ活動によるもの、または〝I shall return〟に呼応して日本軍を監視する現地人のゲリラ部隊からの無線連絡が、沖に所在する米軍機動艦隊へ届いていたのだ。このような対ゲリラ戦闘まで行ったルソン島内での日米決戦は、甚だ特異な戦いだったのだ。これは、他の東南アジア地域での戦いではあまりあり得なかったと、先輩参謀は話された。

先輩参謀の戦訓として次のようなことも話してくれた。

逆上陸してきた米軍の強大さは、唯、物量の差だけではない。戦場での「戦い方」に違いがあったのだと。ルソン島内の戦車戦では、米軍は、航空機や野砲による猛砲爆撃の掩護下で、戦車隊を前面に進出させて日本軍を打撃、その全滅を狙ってきた。「これは、戦術では取り返せない、

大きな戦略レベルで組み立てられた戦いだった」と。そして、先輩は、ルソン島内各地の山岳陣地での肉弾戦を終戦まで続けたが、多くの将兵が亡くなり、それ故、自らを律して、その慰霊と巡拝の旅を戦後何年も続けておられるのだった。

亡父の遺骨収集を思い立ち～バレテ峠を超えて

昭和50年、戦跡訪問団のツアーに2度目の参加、いよいよ父の埋葬の地へ向かった。マニラからツアーのバスで、国道5号線を北上、左の窓からアラヤット山頂を遠くに眺めながら、昨日の先輩参謀の話に出た、マニラ街道あたりの日米両軍の戦車戦は、この山の北側方向であったろうと思いながら向かったバレテ峠は、天下分目の激戦地である。下車して巡拝の時間をとり、手を合わす。あとは、一路、峠から北へ、山を下り5号線上の街、バヨンボン市で下車。ツアーを離れ、単独行動で4泊5日の滞在ホテルへチェックインする。

翌朝、バヨンボン市の東方5キロのソラノ市へジプニーで向かい、そこからは徒歩で郊外の南へ2キロほど、小川（クリーク）にかかる石造りの橋があり、それが、今回の最初の目標地点である。橋から小川の北岸一帯、北東へ300メートルあたりをぐるりと見渡すが、復員社員から聞き取った略地図の椰子の大木も、数軒ばかりのニッパーハウスも、30年の時を経てさすがに跡形もなく、私はしばし呆然とした。タガログ語の通訳を頼み、住民たちに聞いたが、当時は子供だった世代や、戦後の移住者で確かな情報は得られず、如何せん時の壁は厚かった。村人たちが好奇の目で遠巻きに私の方を見ているばかりであった。

翌昭和51年の再訪では、終戦直後からの戦後処理に係わる情報を収集すべく、ソラノ郊外の関係地主や古老を訪問した。地主も代替わりしていて、亡父の埋葬地点の特定には結びつかなかったが、日本での復員者から聞いた場所を、推測で発掘を試みた。また、村人たちに謝礼を払い作業に当たってもらったが、2年目ともなると、村人も幾分打ち解けてきて、話しかけてくる者もいた。その中で、日本兵の頭骨の一部を持っているので、日本に持ち帰ってくれと突然申し込まれた。聞けば、アルコール中毒の治療のため、頭頂骨を髑髏杯に加工して盃として使っていたものとのことで衝撃を受けた。持ち主の初老の小作人の小屋を訪ねると、20年近く保管していた物置からその杯を取り出し、私に差し出した時の彼は、ホッとした表情で、純朴な人柄に伺えた。日本へ持ち帰り、日本政府の鑑定を受け、戦没者として受理され、無名戦士の「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」に納骨された。

昭和52年の訪比では、前年、顔見知りになった村人が、積極的に協力してくれて、台湾拓殖グループのニッパーハウスの、当時の地主の娘さんを探して話を聞き、亡父の埋葬地らしき処を特定したと案内された。その場所を発掘して、出てきたお骨の一部を日本に持ち帰ったが、残念ながら人骨ではないとの鑑定結果だった。

昭和53年の訪比は、最終回と心に決めてバレテ峠を往復した。現地の人々にお世話になったお礼の挨拶回りをして立ち去ろうとした時、水田の畦道でこれまでに面識のなかった古老のひとりが声をかけてきた。「私は、戦争の時、日本人の埋葬とその後、花を供えて祈りを捧げている人たちの姿も見ていた。その場所は、私の家のニッパーハウスからすぐの所だったので、一部始終見ていたよ」と、しかし今は、「その場所は水田になっているよ」と。そして「遺体は、別の場所に移されているよ」とのことで、その移された場所までは知らない様子だったが、何も知らず何度も訪れる私を気の毒に思って、思い切って声をかけてくれたのだと思う。亡父の埋葬地は畠の傍らと、台湾拓殖の関係者から聞いていたが、戦後、すぐ近くの川の上流にダムができて、畑地が水田に開発されて、地形まで変わっていたのだった。

こうして、5年にわたる亡父の遺骨収集の旅は、30年の時の壁に阻まれたが、亡父の終焉の地を訪れることができたことで、せめてもの供養になったと思う。

疎開邦人はキャンガンへ再北進

昭和20年5月中旬、山下方面軍はバヨンボン地域へ疎開していた邦人グループに対して、米軍の北進に伴い北部のキャンガンへの移動を指令してきた。そこで、ソラノ郊外の亡父の勤務先の台湾拓殖の社員たちは、いち早く移動を始め5月下旬、

国道5号線を北上、北東のバガバグ経由で、国道4号線を左折して、マガット河の支流のラムット川の橋を渡り、一路北上してキャンガンを目指して直進し、難を逃れたと聞く。だが、その少し後に、大変な惨劇がこのラムット川で発生したのだ。

国道5号線筋から少し離れた地域から脱出した邦人グループの生還者で「PIC」ツアーの語り部の女性から聞いた話だが、このグループには婦女子たちがかなりいたようだ。しかも、6月に入り雨季の大雨でラムット川の橋梁が流失していた。そのため、護衛していた日本の兵士が、近くの浅瀬を探し彼らを手助けしながら渡河中、惨劇は起きたのだ。ちょうど、ラムット川の南岸には、国道4号線を北上してきた米軍戦車隊の一団が到着、橋の流失を知るや、南岸から戦車砲などで一斉射撃を始めた。北岸には数名の日本の護衛兵もいたが、相手が戦車では何もできず渡河中の婦女子たちは、ただ悲鳴を上げるばかりで大勢が犠牲になり、急流の中に流された。その時、南岸の米戦車兵の（邦訳すると）「ジャップ奴、早く手をあげろよ！　そしたら俺たちも早くママのところへ帰れるんだよ」という叫び声が耳に入った。語り部の彼女は、何とか北岸に渡り終えていたが、ただやるせなく嗚咽するばかりであった。戦場とは言えあの有様は「不条理、ただ不条理としか言いようがありませんでした！」と話してくれた。

昭和20年6月末には邦人が移動したキャンガンも、同地周辺の山岳地帯を最後の山下方面軍の固守陣地としたので在留邦人は谷合のジャングルへ退避した。軍は険しい山稜での布陣をする。こうして、飢餓、疾病に堪えながら、8月の終戦に至ったのだ。

異境に斃れて～無念の山野

昭和20年6月4日、遂に米軍がバレテ峠を突破して、その戦車隊が国道5号線を東北方へ坂を下りながら急進してきた。おびただしい犠牲者を出した日本軍は、すでに組織だった撤退もままならず、ただ、5号線を避けて東側のジャングルの中へ、三々五々後退し、その行く先は、東北方へ向かうマガット河の最上流域帯で、ほとんどが人跡未踏の藪の中を、戦傷・戦病の身体をただ引きずって、下り斜面とはいえ遠くソラノ地域あたりに辿り着いた時には、多くの将兵たちが力尽きて斃れ死んでいった。

その有様は、「PIC」のツアーガイドで、撤退の体験者が「語り部」としてツアーにおられ、参加者に語られたのをお聞きした。酷暑の南の国で、唯々気力と体力だけで、山道をトボトボと足を前に運び、時折うずくまりながら、また先行者で斃れた戦友に声をかける余裕もないまま歩き続け、気が付いたら広大なマガット河添いの雑木林にたどり着き安堵したと。ここまでの長丁場で疲れ果て、夜が明けると息をしていない戦友も増えてきた。周りの戦友たちが最小限の穴を掘り、遺体を仮埋葬するのが精いっぱいだった。

私は、予てより、厚生省援護局調査課から「PIC」の事務局を通じてルソン島の北部山岳州内の邦人の遺骨分布状況とその未処理地帯について、調査の協力方を打診されていた。そこで、亡父の遺骨収集活動の傍ら、現地で知り合った住民の協力を得て、ソラノの街の南方域のマガット河中流域での聞き取り調査を引き受けた。

そこで、現地人二人と通訳を伴ってソラノの街の南方へ、小川の石の橋を渡り南岸域の雑木林の中へ向かった。向かった先には、マガット河の河川敷があり、原住民のニッパーハウスが散在していた。同伴の現地人の二人は、終戦前後はまだ十代の子供だったが、終戦後の戦場の復旧作業に関わった父親たちの後をついて回って当時のことはよく知っていたのだ。ある地点では、「この凹地には、遺体が数体まとめられて埋葬してあるよ」と思い出すように話してくれる。また、衝撃的だったのは、金歯の金を取るために、大人たちが頭蓋骨を小川で洗っていたのを見た話もしてくれた。昭和51～52年当時、すでに戦後30年以上経過していて、彼らの親世代は皆、もう他界していたのだ。私が預かって「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」に納骨の髑髏盃も彼らの親たちが加工したのだろう。

最後に、西側にある小山の奥に案内され、その一角は陽も射さない薄暗いところだったが、ここは市役所指定の集合埋葬地であったという。知る人も無く空しく草むす屍と眠る、戦病死の諸士の英霊を思い、その場所に線香をあげて、私は唯々冥福を祈った。

こうして、昭和51年と52年の2回にわたって、マガット川流域のあちらこちらに足をのばしながら、聞き取り調査をして、見取り図を添えて数カ所の調査報告書を厚生省援護局調査課へ提出した。

おわりに

時代も、昭和・平成・令和へと移り変わり、戦後76年の時が流れ、私も間もなく95歳を迎えようとしている。享年48の亡父の二倍近くの我が人生を振り返り、また我が息子たちも50歳を過ぎて、今更ながら亡父の短い生涯に思いを馳せている。また亡父のみならず数多の戦争犠牲者を悼む気持ちで一杯である。

私自身は、戦場に赴く前に終戦を迎えたが、亡父の遺骨収集を思いたちフィリピン戦跡訪問団に参加した。訪問団の人々とのふれあいの中で知った、ルソン島の激戦のことなどを思い、戦争を知らず平和な日本で50年余りを過ごしてきた息子たちにも、戦争の虚しさや平和の大切さを語り継ぎたいと思い、本稿を認めた次第である。